

ヴィゴツキー理論の発展とその時期区分について()

神 谷 栄 司

〔抄 録〕

30年代のヴィゴツキー理論には 文化・歴史理論または記号(言語)による媒介的発達理論, 意識の構造の発達理論, 心身の統一性を基礎にした人間の心理学という3つの路線がまだ一本の大道に合流せずに走っている。そうした合流の機軸や論理を明らかにしてこそヴィゴツキー理論の全体像を発展的に捉えたことになる。以上の筆者の仮説を予備的に検討することが拙稿の目的である。ヴィゴツキーが述べていないこと(少なくとも筆者も他の研究者も上記機軸とその論理をまだ扱っていない)が対象となるため, 方法的には, ヴィゴツキーが描いた図式(上記に関する図式)を採り入れつつ補足する図式を提起することと, 内容的にはヴィゴツキーが理論的な影響を受けたパフチンとスピノザの諸説によって補足するという戦略をとった。

キーワード ヴィゴツキー, パフチン, スピノザ, 記号, 心身問題

情念の問題はデカルトの全体系にとって唯一の躓きの石であった。
ヴィゴツキー『情動に関する学説』

Ⅱ 30年代ヴィゴツキー理論の統一軸をめぐって

1. I(前号)において, 筆者はヴィゴツキー理論の発展の時期区分を次のような5つに区分する仮説を提起した。

A 「心理・意識・無意識」(1930年)から『情動に関する学説』(1931～33年)における心身過程を視野にいたした「人間の心理学」の構築にむけた時期。

B 「人間の具体的心理学」(1929年), 「心理学的システムについて」(1930年)から『思考と言語』(1934年), 「知的遅滞の問題」(1935年)における「意識の構造化」の時期。

C 「子どもの文化的発達の問題」(1928年)から『思考と言語』(1934年)における「文化・歴史理論」(「自然・文化理論」等)の時期。

D 反射学批判 (1924 年) から『心理学の危機の歴史的意味』(1927 年)における心理学の方法論を構築しようとした時期。

E ハムレット論 (1915 ~ 16 年) から『芸術心理学』(1925 年)における文学および芸術心理学の研究の時期。

いまここで再び考察しようとしている 30 年代のヴィゴツキー理論は C から A に至る時期の理論である。とくに A を一つの段階 (または路線) として捉えることは従来のヴィゴツキー理解では希薄であった。

条件的に C, B, A に対応するヴィゴツキーの主著をあげるとすれば、『思考と言語』はやはり C を代表する主著である。そこで取り上げられているのは、書名からも明かなように、思考の機能であり、言語 (内言) による思考の媒介的発達なのである。だが同書第 7 章 (最終章) で彼は、思考の研究が言語的思考そのものの研究で完結しないことを次のように予告するのである。

最後に私たちに残されているのは、語による思考の内的側面の分析における最後の最終的な一歩を歩むことである。思惟はまだこの過程における最後の審判ではない。思惟そのものは他の思惟から生まれるのではなく、私たちの欲望と欲求、興味と意欲、感情と情動を包摂する私たちの意識の動機領域から生まれるのである。思惟の背後には感情的・意志的傾向が控えている。この傾向のみが思考の分析における最後の「なぜ」に答えることができる。私たちは上で語の雨を降らせる低く垂れた雲に思惟を喩えたのに対して、もしこの比喩を続けるとすれば、雲を動かす風に動機を喩えねばならないであろう。Нам остается, наконец, сделать последний, заключительный шаг в анализе внутренних планов речевого мышления. Мысль – еще не последняя инстанция в этом процессе. Сама мысль рождается не из другой мысли, а из мотивирующей сферы нашего сознания, которая охватывает наше влечение и потребности, наши интересы и побуждения, наши аффекты и эмоции. За мыслью стоит аффективная и волевая тенденция. Только она может дать ответ на последнее «почему» в анализе мышления. Если мы сравнили выше мысль с нависшим облаком, проливающимся дождем слов, то мотивацию мысли мы должны были бы, если продолжить это образное сравнение, уподобить ветру, приводящем в движение облака. (Выготский, Л. С. 1934/1982, с 357//2001, pp. 427-428)

「雲を動かす風」の研究は、演劇家スタニスラフスキーのポドテキスト論の援用はあるものの、『思考と言語』のなかでは深く追求されずに予告として終わっている。

だが、B に対応する著作のなかでは、思考と動機 (感情・情動等) の機能間の関係にとどまらず、それらを含めた意識の構造化が主張され、研究されている。そうした著作のうちで活字化されているものとしては「年齢の問題」が中心であり、それに続いて「乳児期」「1 歳の危機」「幼児前期」「3 歳の危機」「7 歳の危機」があり、さらに「移行年齢におけるネガティブな相」〔13 歳の危機を扱っている〕「学齢期」「学齢期の思考」が挙げられる⁽¹⁾。

I でも触れたように、1924 年以来の心理学研究を総括したと言える『高次心理機能の発達史』(1931 年)の最終章で、ヴィゴツキーは個別的心理機能の媒介的発達 = 文化的発達の研究を止揚して、全体的文化的発達 = 人格発達の研究の必要性に触れ、その観点から乳児期から思春

期までの発達を素描している。つまり、ヴィゴツキーは、「有機体的発達〔自然的発達〕の領域では、アリストテレスの表現によれば、全体はその諸部分よりも先にあり、その諸部分そのものとその作用、つまり器官と機能は全体の変化に依存して変化する。これとまったく同じように、ある機能の文化的発達の領域における最も小さな一歩でも、そのきわめて萌芽的な形態であっても、人格の発達を前提とするのである」как и в области органического развития, целое, по выражению Аристотеля, было раньше своих частей, сами эти части и их действие, т. е. органы и функции, изменяются в зависимости от изменения целого. Точно так же самый малейший шаг в области культурного развития какой-нибудь функции уже предполагает развитие личности хотя бы в самых зачаточных формах..(Выготский, Л. С., 1931/1983, с. 316//2005, р. 377) と述べている。まさしく「年齢の問題」をはじめとした意識の構造化の観点は『高次心理機能の発達史』最終章の観点から生み出されたものと推察することができる。

このような意味で、Cにおける媒介発達理論のいっそうの精緻化(とくに内言論)とBにおける意識の構造化の二路線の前史はともに『高次心理機能の発達史』にあると言ってもよいであろう。

Aは『思考と言語』の視点から見れば、「雲を動かす風」そのものを研究していたことになる。だがAに対応する主たる著作『情動に関する学説』の心身一元論的情動論に先行する論文には「心理・意識・無意識」があり、その遥か以前の研究『芸術心理学』を前史とするのが適当であろう。

もっとも『芸術心理学』は芸術作品を「人々に情動をひき起こすことを目指した美的記号の総和」совокупность этических знаков, направленных к тому, чтобы возбудить в людях эмоции とみなすヘンネッケンの定義を肯定し、「そうした記号の分析にもとづいて、それに照応する情動を再創造すること」на основании анализа этих знаков воссоздать соответствующие им эмоции を課題にし、そのような意味で芸術を「感情の社会的技術」общественная техника чувства と規定している(Выготский, Л. С., 1925/1987, с.9 //1971, р. 21)。この面で同書は文化・歴史理論や内言論の出発点をなす著作と呼ぶことができる。だが、同書のエピグラフには「身体が何をなしうるかについて、今日まで、誰もまだ定義しなかった」から始まるスピノザの『エチカ』第3部定理2備考からの抜粋があり、しかもこの備考が同書執筆の導きの糸であったとさえヴィゴツキーは考えている(「はじめに」および最終章末尾)。『エチカ』第3部定理2はまさしく心身問題を論じた定理である。さらに「芸術のマルクス主義的考察は、とくにその最も複雑な形態において、芸術作品の心身作用の研究を含まねばならない」марксистское рассмотрение искусства, особенно в его сложнейших формах, необходимо включает в себе и изучение психофизического действия художественного произведения。(Выготский, Л. С., 1925/1987, с.15 //1971, р. 28) と述べており、ヴィゴツキーは美的記号の心身作用という課題意識を持っていたことを示している⁽²⁾。

以上のことを総括するとすれば、『芸術心理学』から派生してきたAとC、『高次心理機能

の発達史』から派生してきた B と C, というように前史を捉えうる A・B・C の三つの路線が 30 年代のヴィゴツキー理論には同時に走っており, いわば『思考と言語』の道と「年齢の問題」の道と『情動に関する学説』の道の三つの道がまだ交わずに走っている。だがそれらはひとりの理論家の描いたものである以上, 一本の大きな道に合流していかざるをえないであろう。残念ながら, 筆者が今までヴィゴツキーを読んできた限りでは, 一本の大きな道への合流点, 統一軸とその論理は見えてこない(もちろん筆者は 30 年代にヴィゴツキーが書いたものを読み切った訳ではないし, まだ活字化されていないものも遺されているので, どこかに統一軸が描かれているかも知れないが)。

もちろん, 記号を統一軸にする見解も成立するであろう。しかし, そうであるなら, 感情と言語を扱った『芸術心理学』と思考と言語を扱った『思考と言語』でヴィゴツキー理論は完結してしまい, わざわざ『情動に関する学説』を書いて心身問題という難問を提起する必要は出てこないであろう。少なくとも, 記号, 心理, 身体という三つのモメントを包摂する論理が必要とされるのである。

統一軸がヴィゴツキーに明示的でないと前提に立つとすれば, 筆者が統一軸に仮説的に迫りうる戦略は, ひとつは図式的に迫ることであり, ふたつにはヴィゴツキーが心身問題で依拠したスピノザと, 記号・言語の問題で依拠した(あるいは相互に影響を与えあった)バフチンとを参照することである。

2. ヴィゴツキーが残している文化的発達の図式を取り上げてみよう。図 1 はヴィゴツキーが「子どもの文化的発達の問題」のなかで描いた有名な三角形であり, 同様の図は『高次心理機能の発達史』第 3 章では上下が逆さまに描かれているが, 本質的には同じである。

前者においては, 自然的記憶と媒介的記憶をもとに媒介的発達が説明されている。すなわち, 「自然的記憶のもとでは, 二つの点 AB のあいだに単純な連合的結合または条件反射的結合が

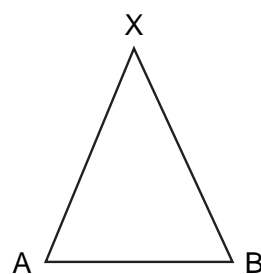


図 1

(出所: ヴィゴツキー「子どもの文化的発達の問題」1928)

確立される。何らかの記号を用いる記憶術的記憶のもとでは, ひとつの連合的結合 AB のかわりに, 二つの他の結合 AX と BX が確立され, それらは同じ結果をもたらすが異なる道を通るのである。AX と BX の各々の結合も, AB の結合と同じように, 大脳皮質における結合を繋ぎあわせる条件反射的過程である」 При натуральном запоминании устанавливается простая ассоциативная или условно-рефлекторная связь между двумя точками A и B.

При мнемотехническом запоминании, пользуемся каким-либо знаком, вместо одной ассоциативной связи АВ устанавливаются две другие AX и BX, приводящие к тому же результату, но другим путем. Каждая из этих связей AX и BX является таким же условно-рефлекторным процессом замыкания связи в коре головного мозга, как и связь АВ.(Выготский, Л. С., 1928/2003, с. 195-196)。後者はより一般的に媒介を論じているが、

趣旨は前者と同じである。

時期的には上記両著作の中間にある「人間の具体的心理学」のなかでも、ヴィゴツキーはいくつかの図をもちいて自分の考えを表している。それぞれの図とそれらに対するヴィゴツキーの解説を紹介しておきたい。

図2は、道具と記号を区別し、「刺激・客体」の対象と「刺激・道具」の対象を区別した図である。

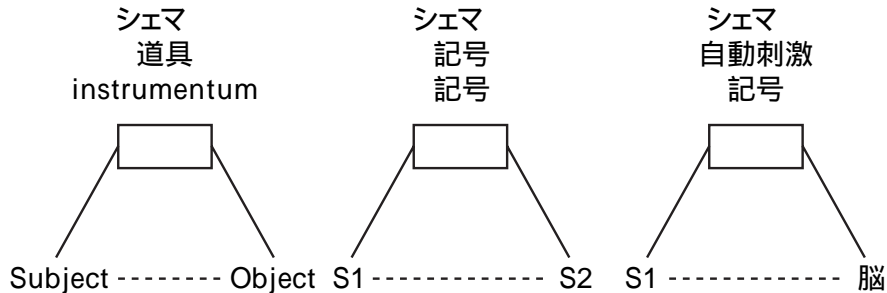


図2（出所：ヴィゴツキー「人間の具体的心理学」1929）

ヴィゴツキーはこの図を次のように解説している。「他のものへの直接的な関係と媒介的な（記号を介した）関係。自己に適用することは直接的には不可能である。媒介的には可能である。最初は、したがって、記号は客体と主体のあいだに道具として置かれる〔シェマを参照＝引用者〕。後には、私と私の記憶とのあいだに置かれる〔シェマを参照＝引用者〕。操作の刺激・客体は刺激・道具の作用する客体ではない。これは記号の道具との最も主要な相違である。道具的刺激の作用する客体は脳である」*Непосредственное и опосредственное (через знак) отношение к другим. Непосредственно невозможно применить к себе. Опосредственно – можно. Вначале, следовательно, знак помещается между объектом и субъектом, как орудие. Позже – между мной и моей памятью. Стимул-объект операции не есть объект воздействия стимула-орудия: это главнейшее отличие знака от орудия. Объект воздействия инструментального стимула – мозг.* (Выготский, Л. С., 1929/2003, с. 1025)。

記号は最初には主体と客体のあいだに道具として置かれるが、後には私（S1）と私の記憶（S2）のあいだに置かれる、という道具と記号の区別が図1にはなかった点であり、図1での条件反射的結合は、ここでは自動刺激の場合の脳への作用となっている。

さらに「人間の具体的心理学」には図3が示されている。

これに対するヴィゴツキーの解説は次のものである。「構成化は、それが二平面的で二客体的である点によって、道具的操作（道具的思考）と異なっている。

もしS1とS2がひとりの人のなかにあるとすれば、操作はたえず二つの客体を持つことになる。すなわち、脳と心理的課題（記憶する等）の客体とである。本質的には、これは、Sが道具ではない（つまり物理的に作用しない）ことによって、課題が心理学的に（客体ではなく行動に）作

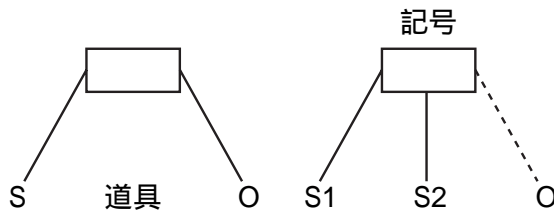


図 3

(出所：ヴィゴツキー「人間の具体的心理学」1929)

心理学的課題
アルセーニエフ

用することによって引き起こされている。客体が他者の脳である場合は、すべては容易である。客体が自分の脳である場合には困難を伴う」Конструкция тем отличается от инструментальной операции (Werkzeugdenken), что она двупланный, двуобъектна. Если S1 и S2 в одном

лице, то у операции всегда два объекта: *мозг и объект психологической задачи (запомнить etc.)*. В сущности, это обусловлено тем, что S не [есть] орудие (т. е. не физически действует), а что задача *психологически* воздействует (не на предмет, а на поведение). Если объект чужой мозг, то все легко. Трудно, когда объект – свой МОЗГ. (Выготский, Л. С., 1929/2003, с. 1026)。

以上のような図 2, 図 3 の五つの図式の最後のものが、「人間の具体的心理学」において、記号による媒介的発達に関するヴィゴツキーの立場をもっとも良く表すものである。構成化が二平面で二客体的であるのは、「O・記号・S2」という課題の心理学的遂行と「S1・記号・S2」という脳への作用が同時的に実現されることを示している。

しかし、この図式はさらに一つの視点から補足されうる。「もし S1 と S2 がひとりの人のなかにあるとすれば」とヴィゴツキーが用いる仮定法から、S1 と S2 がそれぞれ別の人間のなかにあることを仮定することも自然なことであろう。事実、ヴィゴツキーはこの図式の説明としてではないが、後に『高次心理機能の発達史』で述べた心理間機能から心理内機能への転化という文化的発達の理論に繋がる次のような命題を「人間の具体的心理学」のなかで記している。

以前には他者への働きかけの手段であったものが後には自己への働きかけの手段となる、という一般法則を私たちは知っている。この意味で、あらゆる文化的発達は三つの段階を通過する。すなわち、自己そのものの段階、対他者〔他者のための〕段階、対自的〔自分のための〕段階である。……他者を通して私たちは自己になる。純粋な論理的形式では、文化的発達過程の本質はその点にある。……人格が対自的に自己そのものとなるのは、人格がまず自己そのものを対他的に現すことを通してである。これが人格の生成過程である。何故に高次機能におけるすべての内的なものが必然的に外的なものであったか、すなわち、今日対自的であるものが対他的であったかは、このことから明らかとなる。これが内的なものと外的なもののある問題の中心である。……あらゆる高次心理機能は外的であり、つまり、社会的であった。それは機能となる前には、二人の人間の社会的関係であった。自己への働きかけの手段は、もともとは他者への働きかけの手段であり、人格への他者の働きかけの手段であった。Мы знаем общий закон: раньше средство воздействия на других, потом на себя. В этом смысле все культурное развитие проходит 3 ступени: в себе, для других, для себя. ... Через других мы становимся собой. В чисто логической форме сущность процесса культурного развития в этом и состоит. ... Личность становится для себя тем, что она есть в себе, через то, что она прежде являет свое в себе для других. Это есть процесс становления личности. Отсюда понятно, почему с необходимостью все внутреннее в высших функциях было внешним: т. е. было для других тем, что ныне есть для себя. Это центр всей проблемы внутреннего и внешнего. ... Всякая высшая психологическая функция была внешней – значит она была социальной; раньше чем стать функцией, она была социальным отношением двух людей. Средства воздействия на себя – первоначально средство воздействия на других и других на личность. (Выготский, Л. С., 1929/2003, с. 1021)。

人間の hoch 心理機能はもともと「二人の人間の社会的関係」であったというこの命題は、上述の S1 と S2 を二人の異なる人間と仮定しうることを示している。いいかえれば、他者との対話が内的対話に移行することをも上述の図式は示しうるのである。

したがって、図3の最後の図式は、媒介による心理学的課題の実現、脳への作用、他者との対話の内的対話への転化、の三つの側面を示していると考えることができる。

3. この図式を更に、ヴィゴツキーと同時代人であったパフチンの『マルクス主義と言語哲学』(1929年)によって補足してみたい。

パフチンのこの書物、とくに第1部の三つの章は、イデオロギーと心理学を記号によって関連づけようとする、すぐれて人間論的な理論を示し、ヴィゴツキーの図式をさらに広範な世界のなかで位置づけるものである。もちろん、本章の課題はパフチン理論そのものの分析ではなく限定的なものであり、ヴィゴツキーの図式の補足という視点からパフチン理論を取り上げるにすぎない。そうした視点から幾つかの命題をとりだし、図式化しておこう。

第1に、パフチンの言うイデオロギーは、「イデオロギーにかんする諸科学」 науки об идеологиях を「論理学、認識論、美学、人文諸科学など」 логика, теория познания, эстетика, гуманитарные науки и пр. としていることに示されるように(Бахтин, М. М., 1929/1993, с. 37//1989, р. 51), いわゆる政治イデオロギーよりも遥かに広く、ある意味では「観念的なもの」と同義とも言いうるほどに広い。彼はイデオロギー的所産を自然の物体、生産用具、消費財などと区別しつつも、次のように両者を関連づけている。

... どの物理的物体も何かの像として、いわば、ある個別的事物における自然の慣性や必然性の具現化として捉えることができる。ある物理的物体のこうした芸術的・象徴的像はすでにイデオロギー的所産なのである。...любое физическое тело можно воспринять как образ чего-нибудь, скажем, как воплощение в данной единичной вещи природной косности и необходимости. Такой художественно-символический образ данной физической вещи является уже идеологический продукт.(Бахтин, М. М., 1929/1993, с. 13//1989, р. 15)

この見解から当然ながら、記号としてのイデオロギーという命題が生まれてくる。「記号の存在しないところには、イデオロギーも存在しない」Где нет знака – там нет и идеологии.(Бахтин, М. М., 1929/1993, с. 13//1989, р. 15) という規定や「イデオロギー的記号」 идеологический знак という概念がそれである。「何かの像」とは何かの記号に他ならないからである。これを図式で描けば、図4 シェマ となるであろう。「イデオロギー」と「現実」の境界が点線で描かれるのは両者の区別とともに連関を示している。X は記号を表している。

もっとも、記号と現実の関係は直線的ではない。パフチンは「記号はただたんに現実の一部として存在しているだけでなく他の現実を反映し屈折させるのであり、それ故に、記号はこの現実を歪曲したり、あるいはこの現実には忠実であったりすることもでき、一定の視角等

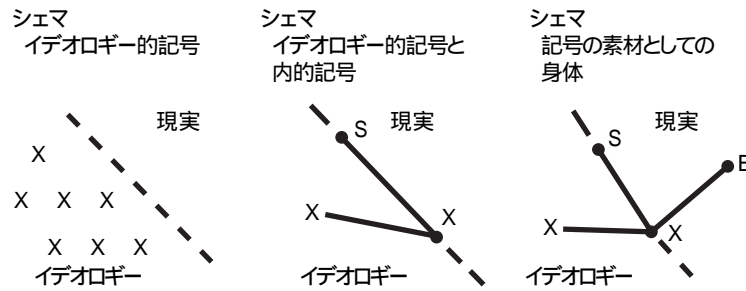


図 4

の下に現実を把握することができる」Знак не просто существует как часть действительности, но отражает и преломляет другую действительность, поэтому-то он может искажать эту действительность или быть верным ей, воспринимать ее под определенным углом зрения и т. п. (Бахтин, М. М., 1929/1993, с. 14//1989, p. 16) と述べ、記号のもつ現実の歪曲的反映にも言及している。図 4 の X はそうした意味を含んで捉えられたいが、筆者は図の上では表現していない。

第 2 に、イデオロギーと人間の心理との関係である。バフチンは、イデオロギーまたはイデオロギー的記号は人間がそれを意識しようがしまいが客観的に存在するという立場をとる (図 4 シェマ I)。その上で、「内的記号なしには外的記号は存在しない」Нет внешнего знака без внутреннего знака. (Бахтин, М. М., 1929/1993, с. 46//1989, p. 63) のであり、「心理的実現がそのイデオロギーにより豊かにされることによって生きているのと同じように、イデオロギー的記号はその心理的実現によって生きているのである。心理的体験とは外的なものとなりゆく内的なものであり、イデオロギー的記号とは内的なものになりゆく外的なものである」Идеологический знак жив своим психическим осуществлением, так же, как и психическое осуществление живо своим идеологическим наполнением. Психическое переживание – это внутреннее, становящееся внешним; идеологический знак – внешнее, становящееся внутренним. (Бахтин, М. М., 1929/1993, с. 46//1989, p. 64) という規定からも明らかであるが、イデオロギーと人間心理の関連を記号のなかに見いだしている。つまり、「イデオロギー的記号とは心理とイデオロギーとの共通の領域であり、物質的で、社会的で、意味を持った領域である」Идеологический знак – общая территория как психики, так и идеологии, территория материальная, социологическая и значащая. (Бахтин, М. М., 1929/1993, с. 39//1989, p. 53) が、それと同様に内的記号もまた心理とイデオロギーとの共通の領域となる。図 4 シェマ では、直線 XX の左端はイデオロギー的記号、右端 (より正確には右端の X と S の直線) は内的記号を表している。S は主体または心理である。

なお内的記号とはもっぱら内言である。それは心理学とイデオロギーとの接点にあり、バフチンは内言は「対話の受け答え」реплики диалога に似ており、その本性は「内的対話」внутренний диалог であるとしている (Бахтин, М. М., 1929/1993, с. 45//1989, p. 62)。

第3に、バフチンもまた自分の理論のなかに身体を位置づけているが、それは記号との関連でおこなわれている。記号は自己の実現する素材、つまり記号的素材 *знаковый материал* を必要とする。バフチンは心理にとって記号的素材となりうるものは身体である、と考えている。

何が心理の記号的素材になるのであろうか。それは、あらゆる身体的な運動あるいは過程である。つまり、呼吸、血液の流れ、身体の動き、発語、内言、顔の表情、例えば光の刺激といった外的なものへの反応などである。言いかえれば、身体のなかに生じるすべてのものが心的体験の素材となりうる。なぜなら、すべてのものが記号的意味を獲得することができ、表現的となるからである。Что же является знаковым материалом психики? — Любое органическое движение или процесс: дыхание, кровообращение, телесное движение, артикуляция, внутренняя речь, мимическое движение, реакция на внешние, напр. Световые раздражения и пр. Короче говоря, *все совершающее в организме может стать материалом переживания, ибо все может приобрести знаковое значение*, стать выразительным.(Бахтин, М. М., 1929/1993, с. 34//1989, р. 47)

「あらゆる身体的な運動あるいは過程」、つまり発語・内言を含む全体としての身体の動きこそ心理的なものの記号的素材となる。図4 シェマ のBはそれを表している。BはX(記号)の素材であるので、BとSはXを媒介して関係をもつことになり、BSに直線は引かれない。

このシェマ IIIこそ、ヴィゴツキーの三角形を補足する限りでバフチンの記号論を図式化したものである。

4. ヴィゴツキーの図式をスピノザによって補足することに移ろう。

ヴィゴツキーは情動を論じる際にしばしばスピノザを引用しているが、その文献としては「神、人間および人間の幸福に関する短論文」(1658～60年)と『エチカ』(1677年)をあげることができる。

おそらく前者の「短論文」からだと考えられるが、ヴィゴツキーはスピノザのなかに思考と感情の発生的関係を見いだしている⁽³⁾。だが「短論文」ではまだ感情を分析する際に思考のモメントはあっても身体は登場していない。スピノザの生涯を通した思索の集大成であった『エチカ』において心身問題が本格的に扱われたのである。

しかし、難解な『エチカ』そのものの考察は哲学者に譲る他はないが、ここでも、上述してきた図式を補足する限りににおいてスピノザを取り扱うことにしたい⁽⁴⁾。

人間の心理と身体が深くかわり両者はどういう関係にあるかという心身問題が避けて通れなくなるのは、情動の考察においてである。人間が強力な情動を体験するとき、様々な身体的現れ(動悸、息切れ、胃の痛みなど)が生じることは平明な事実である。デカルトは一面では、そうした身体の能動に対する精神の受動として情念を捉えたとし、他面では精神における最高位なものとしての自由意志によって情念を押さえ込めるとした(Descartes, R., 1649//1974)。スピノザの心身一元論が明瞭に現れているのも感情の考察においてであった。

(1) デカルトが思惟と延長を二つの実体とし、したがって精神と身体を二つの実体としたの

に対して、スピノザは実体は神のみであり、思惟と延長は実体の主要な属性であり、したがって精神と身体もそうした実体の様態または属性の様態であるとした。

スピノザは「観念の秩序および連結」は「事物の秩序および連結」と同じものであるという定理（『エチカ』第2部定理7）を解説するにあたり、「思惟する実体と延長した実体とは同一の実体であって、それが時にはある属性のもとに、また時には他の属性のもとに理解されるのである」（同第2部定理7備考）と述べ、思惟に属する観念と延長に属する事物の秩序・連結における一致を導き出している。まさしく純粋な一元論である。精神と身体の関係もこれと同様である。この備考を受けて、スピノザは「精神と身体とは同一の事物であって、それが時には思惟の属性のもとで、時には延長の属性のもとで捉えられる」（同第3部定理2備考）と述べている。これはまさしく純粋な心身一元論であり、人間をコインに喩えるならば、その一面には精神の文字が書かれ他面には身体が書かれているようなものであろう⁽⁵⁾。

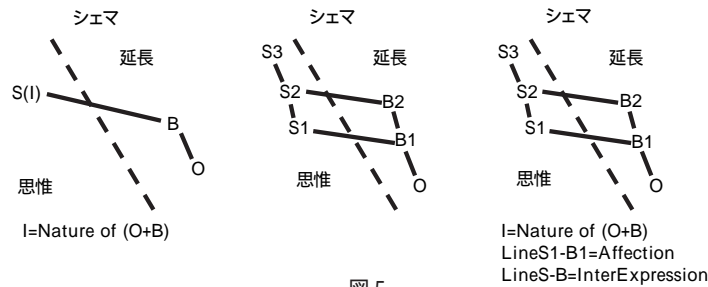
ここから、身体が能動・受動であるとき精神も能動・受動であることが説かれる。「私たちの身体の能動的・受動的状態の秩序は、その本性からすれば、精神の能動的・受動的状態の秩序と共にある」（同第3部定理2備考）。デカルトは精神と身体を2つの実体としたことから、「ある主体に関して受動であるものは、他のある主体に関してはつねに受動であること」（Descartes, R., 1649/1974, p. 95）という『情念論』冒頭の一文にあるように、身体が能動であるとき精神は受動だと考え、そうした精神の受動を情念とした。スピノザの場合は、身体が能動であるとき精神も能動なのであり、身体が受動であるとき精神も受動なのである。

(2) 心身の統一体である人間は彼の外部にある事物をどのように認識するのであろうか。スピノザの認識論の第一の特徴となるものは、観念は外部の事物の本性のみならず自己の身体の本性をも含むという点にある。「人間身体が外部の物体の作用によってもたらされる各々の状態の観念は、人間身体の本性ならびに外部の物体の本性を含まねばならない」（同第2部定理16）。いわば、外部にある物体は身体を通して観念となる。しかも、スピノザは「外部の物体について私たちが持つ観念は、外部の物体の本性よりも私たちの身体の状態により多く関わっている」（同第2部定理16系2）とさえ述べている。外部の物体が人間の場合であっても、スピノザのこの命題は同じままである（例えば同第2部定理17備考中のペテロとパウロの事例）。これを図示すれば、図5 シェマ のようになるであろう。

(3) しかし、スピノザは、こうした外部の物体の身体をくぐった認識という性質はすべての観念に妥当するものとしているのであろうか。

スピノザは『エチカ』のなかで3種類の認識・概念を提起している（同第2部定理40備考2）。

第1種類の認識 憶見〔*opinio*〕もしくは想像〔*imaginatio*〕。それはさらに次の2つの様式に分かれる。1) 感覚を通した個別的事物の知覚、つまり、無秩序な経験に由来する認識、2) ある語を聞いたり読んだりして、事物について想起し、その事物について一定の観念を形成するというような、記号に由来する認識。



第2種類の認識 理性[ratio]。事物の性質にかんする共通概念や妥当な観念に由来する認識。

第3種類の認識 直観知[scientia intuitiva]。神のいくつかの属性の形相的本質の妥当な観念から事物の本質の妥当な認識へと進む認識。

スピノザはこうした種類の認識のうち、事柄の真偽を教えるのは第1種類の認識ではなく、第2、第3種類の認識であるとしている(同第2部定理42)。

スピノザはこうした3つの認識について、身体をくぐった認識をどのように位置づけているのであろうか。スピノザはその点に関して明示的に語っていないが、間接的に推測することはできる。「人間身体と、人間身体がたいてい作用を蒙るところの幾つかの外部の物体とに共通で固有であるものの観念、また、これらの物体の各部分にも全体にも同じように存在する観念は、精神のなかで同じように妥当であろう」という定理(同第2部定理39)が、共通概念の根拠づけのひとつとして提起されていることから、第1種類の認識は当然として、第2種類の認識においても、その観念は身体の本性をも含んでいると考えられる(図5シエマII参照)。

ところで、認識のこの3分類は記号の位置づけという点でヴィゴツキーの心理機能発達論とは異なっている。ヴィゴツキーの場合、低次心理機能と高次心理機能の区別の基準は記号による媒介性にある。スピノザが記号の説明のために取り上げる事例は次のものである。「ローマ人はポムム(りんご)という語の思考から、この分節音とは何ら類似性も共通性も持たぬ果実という思考に直ちに移っていく。この人間の身体はこの二つの事物からしばしば作用を受けたこと、つまり、この人間はしばしば果実を見たときにポムムという語を聞いたにすぎない。こうして、習慣が彼の身体に事物の像を秩序づけるのに応じて、どの人もある思考から他の思考に移るのである」(同第2部定理18備考)。このように、記号にかんするスピノザの説明は連合主義的であると言わねばならない。

こうして、敢えてヴィゴツキーをスピノザの図式に位置づけるとすれば、ヴィゴツキーの知的発達論はスピノザにおける第1種類の認識の第1様式と第2様式のあいだに質的飛躍があり、第1様式とそれ以降の2分類となる。第3種類の認識は純粋な論理学ともいえようが、それはヴィゴツキーの場合には第2の段階に位置していると考えてよいであろう。

(4)感情の視点から精神と身体の問題を捉えた場合には、その両者にはどのような関係が描かれているのであろうか。感情に関してスピノザには有名な定義がある。「感情とは、身

体の行為への能力を増大させまたは減少させ、この能力を促進しまたは制限するところの身体の状態 (corporis affectiones) であり、それと同時に、そうした状態の観念でもある、と解する。

こうして、もし私たちがこうした状態のうちのあるものの妥当な原因であるならば、その感情を能動的状態と解し、反対の場合には受動的状態と解する」(同第3部定義3)。この定義にあるように、感情とは身体の状態とその観念であるから、それは身体と精神の両者を覆うものとなり、したがって、その原因(のひつつ)として「私たち」つまり人間そのものが挙げられている。だが図式的には条件付きで図5 シェマIと同様となるであろう。それは観念を表す図式であったが〔I = Nature of (B + O)〕、ここではSB という直線そのものが感情を表すのである。

(5) 以上に述べてきたことや図5 シェマI, II そのものは、心身平行論の立場をも許容している。身体のみで進行していることは同時に精神のみでも進行している、あるいは、精神のみで進行していることは同時に身体のみでも進行している、という規定は、心身一元論と心身平行論の両者から説明しうるものである。ヴィゴツキーはスピノザを心身平行論者として解釈するのではなく、平行論の覆いのもとに唯物論的見解を把握すべきことを述べている⁽⁶⁾。

こうしたヴィゴツキーの指摘を踏まえれば、スピノザにおける心身問題を把握するとき、思惟と延長という属性間の関係、精神と身体という様態間の関係をただ平行関係としてではなく、その本質をつきとめねばならない。

まず、心身の関係とは、精神と身体のうち、一方が支配的で他方が従属的であり、一方が原因で他方が結果であるような関係ではない。それは「身体は精神に思惟するように決定することができないし、精神も身体を運動や静止や何かその他のこと(もしそうした何かがあるのなら)をさせるよう決定することはできない」という定理(同第3部定理2)が示すごとくである(もっともこの定理も心身平行論を許容するのであるが)。

心身という両様態の関係を把握するうえで注目したいのは、次の定理である。「しかし神のなかには、あれこれの人間身体の本性を永遠の形相のもとで表現する観念が必然的に存在する」(同第5部定理22)。あれこれの人間身体の本性を表現する観念は、永遠の形相のもとという条件付きではあるが、スピノザの思想のなかに存在している。《身体を表現する観念》が両様態の関係を示す一側面である。

ドゥルーズはスピノザの思想のなかから「表現」をキーワードとして取り出している(Deleuze, Gilles, 1688//1991)。彼はスピノザにおける属性、様態、観念の表現的性格を指摘し、しかも、その表現の意味を《表現しつつ内包すること》としている。そうであれば、《身体を表現する観念》とは逆の《観念を表現する身体》という関係も成立するはずである。この点はドゥルーズが指摘していない点であるとしても、論理的にはそう言いうる。身体も観念も様態なのであって、それぞれが神に由来し神を分有している以上、少なくとも身体は精神の本質を永遠の形相において表現することができることになる。なぜなら、「事物の表象・観念が精神のな

かで配置されるのとまったく同じ秩序と連結のなかに、身体の状態または事物の像が配置される」(『エチカ』第5部定理1)とともに、「身体の状態の秩序と連結に応じて、観念の秩序と連結が精神のなかに生じる」(同第5部定理1証明)のであり、さらには、「観念の秩序と連結は事物の秩序と連結と同じである」(同第2部定理7)からである。こうしてスピノザの論理では、観念が事物と身体を表現し内包するのと同じように、身体は観念と事物を表現し内包しても不思議ではないのである。ついでに言えば、論理的には、事物もまた観念と身体を表現し内包することにはなるのであるが⁽⁷⁾。

以上を図示したものが図5シエマIIIである。

5. ヴィゴツキー理論の全体像を図式化するために、ヴィゴツキーが未解明に遺した部分を彼が影響を受けたパフチンとスピノザによって補うという作業を行ってきた。残されているのは、それらを総合した図式を提起することである(図6)。

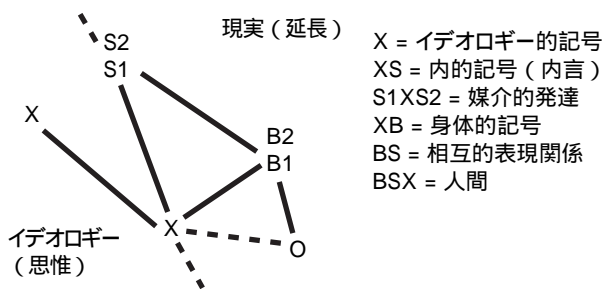


図6 ヴィゴツキー理論の全体像

X-X-S1・S2 という流れはヴィゴツキー『芸術心理学』で扱われた記号と高次の情動との関係を示している。それはパフチンのイデオロギー的記号論によって補われている。

S1-X-S2 の三角形(上方から見ることは、心理機能の媒介的発達を示すためにヴィゴツキーが書

いたものである。S2 はまず他者であり、次いで自己となる。

X-B はパフチンの場合には身体を素材にした記号であり、ヴィゴツキーの場合には指示的身ぶり・表現的身ぶり・俳優の演技である。

B1-S1 はスピノザにおける感情、ヴィゴツキーの場合には低次の情動を示すであろう。

B1-S1, B2-S2 は精神と身体の相互的な表現を示している。

これはヴィゴツキー理論の全体像を表す仮説的な図式である。ただし「年齢の問題」で提起された子どもの全体的発達を示すには立体図が必要となるので、ここには含まれていない。

ヴィゴツキー理論の各部分を取り上げてより精緻に解明することも重要な課題ではあるが、かなり翻訳も整いつつある今、ヴィゴツキー理論の全体を発展的にどう捉えうるのかを解明することが、それ以上に重要な課題となっている。とくにヴィゴツキーが『情動に関する学説』のなかであれほどまでに心身問題に関心を寄せたことがヴィゴツキー研究では十分に踏まえられていないと感じられる。記号(言語)と感情の問題は『芸術心理学』で語られ、記号(言語)と思考の問題は『思考と言語』で語られているが、もし記号(言語)を軸にすれば、なぜヴィ

ゴツキーがスピノザに依拠して心身問題を論じようとしたかが理解できなくなる。スピノザによる心身問題の解明から、パフチンのように身体を記号の素材としてのみ捉えることの狭さを指摘することもできる。しかし他方では、スピノザの認識論における記号の位置づけはヴィゴツキーには許容できないものであろう。パフチンの強さとスピノザの強さを総合し、それぞれの弱さを克服することこそ、ヴィゴツキー理論の全体像の究明に資することになるであろう。

そうしたことを意識しながらヴィゴツキー理論の全体像を捉えることを本章では意図した。ヴィゴツキーが好んで引用したように、部分よりも前に全体が変化する(アリストテレス)とすれば、全体の理解は部分の理解と無関係ではありえない。デカルトの「躓きの石」であった情動論はヴィゴツキーの場合には飛躍のための石であったと予感される。図6はそうした全体像のための仮説であり、精神 身体 記号の三角形こそ人間を示すという仮説である。だが残念ながら筆者の図式はまだ未成熟にとどまっている。

〔注〕

- (1) 「年齢の問題」から「7歳の危機」までは、Л. С. Выготский Собрание сочинений, т. 2, М., Педагогика, 1982. (邦訳はヴィゴツキー『新・児童心理学講義』柴田義松・宮坂琇子他訳, 新読書社, 2002年に収録されている。ただし「年齢の問題」には一部割愛箇所がある)に、それ以外のものは、Выготский, Л. С., Лекции по педологии (児童学に関する講義), Ижевск, Издательский дом «Удмуртский университет», 2001. に掲載されている。
- (2) なお、この引用箇所についてヴィゴツキーは次のような註を付けている。「私たちの技術における社会的メカニズムは生物学的作用を廃棄したりその位置を遮ったりしないが、一定の方向にそれを働かせ、それを自己に従わせる。それは、生物学のメカニズムが力学の法則を廃棄したりそれを遮ったりせずに、その法則を自己に従わせるのと同じである。生物学的なものが力学的なものの上に建て増しされるのと同じように、私たちの身体において社会的なものは生物学的なものの上に建て増しされるのである」Социальные механизмы в нашей технике не отменяют действия биологических и не заступают их места, а заставляют их действовать в известном направлении, подчиняют их себе, подобно тому как биологические механизмы не отменяют законов механики и не заступают их, а подчиняют их себе. Социальное надстраивается в нашем организме над биологическим, как биологическое над механическим. (Выготский, Л. С., 1925/1987, с.15 //1971, р. 367)。ヴィゴツキーが後に論じるのは自然的発達と文化的発達の融合 слияние, 心身の統一性 единство であって建て増し надстройка ではないが、しかし、ここに心身を全体的に捉えようとする視点の出発点を見いだすことができる。
- (3) ヴィゴツキーがスピノザのなかに思考と感情の発生的関係を見いだしたことは、次のヴィゴツキーのことは明示的である。

「スピノザ理論の基礎となるのは次のものである。彼は決定論者であり、ストア派とは違って、人間は感情への支配力をもっており、理性は情念の秩序や連関を変更し、それらを理性において与えられた秩序や連関と照応したものにしうる、と主張した。スピノザは正しい発生的関係を表現したのである。個体発生的発達の過程における人間的情動は、人格の自己意識の面でも、現実への意識の面でも、一般的構えとの連関のなかに入り込む。他者に対する私の軽蔑は、その人の評価や理解との連関のなかに入り込む。この総合こそ、そのなかで私たちの生活が経過する

и того, что является следующим. Он был детерминист и, в отличие от стоиков, утверждал, что человек имеет власть над аффектами, что разум может изменять порядок и связи страстей и приводить их в соответствие с порядком и связями, которые даны в разуме. Спиноза выражал верное генетическое отношение. Человеческие эмоции в процессе онтогенетического развития входят в связь с общими установками и в отношении самосознания личности, и в отношении сознания действительности. Мое презрение к другому человеку входит в связь с оценкой этого человека, с пониманием его. И этот синтез есть то, в чем протекает наша жизнь. Историческое развитие аффектов или эмоций заключается главным образом в том, что изменяются первоначальные связи, в которых они даны, и возникают новые порядок и связи. (Выготский, Л. С., 1930 / 1982, с. 125)

なお、スピノザの「短論文」では、「憶見」мнение、「信念」вера、「明晰な認識」ясное познание という思考の発達とかわって「情念」страстиや「感情」аффектыが考察されている。

- (4) 以後の『エチカ』からの引用はスピノザ『エチカ』皇中尚志訳、岩波文庫によるが、ヴィゴツキーが読んだと思われる『エチカ』の露訳を参照し、訳文を多少変更している。参照した露訳は、Бенедикт Спиноза Сочинения, т. 1, Санкт-Петербург, Наука, 1999 に収録されている。
- (5) 前号のⅠで述べたように、ヴィゴツキーが心理機能と心理学的機能を区別し、心身統一体としての人間の全体的心理過程を 生理学的過程という用語とのアナロジーで 心理学的過程と呼んだことの背後には、「思惟の属性から見れば精神、延長の属性から見れば身体」というスピノザの心身一元論の見解が存在しているように思われる。
- (6) ヴィゴツキーは次のように述べている。「スピノザの観念論的解釈者はたいいてい、平行論の確認で満足している。現代の実証主義者のあいだに流行する心身一元論の代表者たちの多くも、同じことをしている。だが、この理解は不十分である。平行論のところで立ちどまることは、スピノザを根底まで理解していないことを意味する。平行論の覆いのもとで、スピノザは本質的に唯物論的見解を発展させている。もしスピノザが平行論の限界をもつとすれば、心的諸状態の連関を身体的諸状態の連関から完全に独立したものと見なして、あらゆる状態をもった心の認識はもっぱら思惟の様態として行われる、ということに、彼にはいかなる障碍もないであろう。そうであるなら、スピノザは身体過程の分析に取りかかることさえせず、意識の純粋な諸連関の現象学として自分の心理学を打ちたてたであろう。スピノザ主義とこれ以上に無縁なものを考えつくことはできないであろう。」Идеалистические интерпретаторы Спинозы обычно довольствуются констатированием параллелизма. То же делают многочисленные представители популярной среди современных позитивистов психофизического монизма. Но это понимание недостаточно. Остановиться на параллелизме – значит не понять до конца Спинозу. Под оболочкой теории параллелизма Спиноза развивает по существу материалистическое воззрение. Если бы Спиноза ограничивался параллелизмом, то для него не было бы никаких принципиальных препятствий к тому, чтобы познание души со всеми ее состояниями вести исключительно под модусом мышления, рассматривая связь душевных состояний совершенно независимо от связи состояний телесных. Тогда Спиноза мог бы строить свою психологию как феноменологию чистых связей сознания, даже не прибегая к анализу телесных процессов. Вряд ли можно придумать что-либо более чуждое духу спинозизма.(Виготский, Л. С. 1931-33/1984, с. 166)
- (7) ヴィゴツキーの遊び論には、「行為における回想」「行為における想像」「行為における道徳」という規定が示すように、身体が観念を表現するという発想があると仮定することができる(Виготский, Л. С. 1933a/2003//1989, 1933b/2003)。さらにヴィゴツキーは幼児後期の遊びのひとつの特色を次のように述べている「内的行為の外的行為からの不分離。想像や意味づけや意志

つまり内的諸過程は外的行為のなかにある」(Выготский, Л. С., 1933b/2003)。これも《内的心理的なものを身体が表現する》と解釈することができるであろう。なぜなら自動化された行為を除く外的行為には内的なものなしに考えられないとともに、身体なしにはあらゆる外的行為は考えられないからである。

〔引用文献〕

- Бахтин, М. М., (1929/1993//1989), Волошинов, В. Н. *Марксизм и философия языка: Основные проблемы социологического метода в науке о языке*, М., Лабиринт, 1993. 邦訳はミハイル・パフチン『マルクス主義と言語哲学』桑野隆訳, 未来社, 1989 年
- Выготский, Л. С., (1925/1987//1971), *Психология искусства*, М., Педагогика, 1987. 邦訳はヴィゴツキー『芸術心理学』柴田義松・根津真幸訳, 明治図書, 1971 年
- Выготский, Л. С., (1928/2003), *Проблема культурного развития ребенка*, в кн.: Л. С. Выготский, *Психология развития человека*, М., Смысл-Эксмо, 2003
- Выготский, Л. С., (1929/2003), *Конкретная психология человека*, в кн.: Л. С. Выготский, *Психология развития человека*, М., Смысл-Эксмо, 2003
- Выготский, Л. С., (1930 / 1982), *О психологических системах*, 1930 / в книге: Выготский Л. С., *Собрание сочинений*, т. 1, М., Педагогика, 1982
- Выготский, Л. С., (1931/1983//2005), *История развития высших психических функций*, в кн.: Л. С. Выготский *Собрание сочинений*, т. 3, М., Педагогика, 1983. 邦訳はヴィゴツキー『文化的・歴史的的精神発達の理論』柴田義松・土井捷三・神谷栄司・園田貴章訳, 学文社, 2005 年。ただし, 「算数操作の発達」「記憶機能・記憶術機能の発達」の二章が割愛されている
- Выготский, Л. С., (1931-33/1984), *Учение об эмоциях – историко-психологическое исследование*, в кн.: Л. С. Выготский *Собрание сочинений*, т. 6, М., Педагогика, 1984
- Выготский, Л. С., (1933a/2003//1989), *Игра и ее роль в психическом развитии ребенка*, в кн.: Л. С. Выготский, *Психология развития ребенка*, М., Эксмо, 2003. 邦訳はヴィゴツキー他『ごっこ遊びの世界』神谷栄司訳, 法政出版, 1989 年所収
- Выготский, Л. С., (1933b/2003), *Конспект об игре*, в кн.: Л. С. Выготский, *Психология развития ребенка*, М., Эксмо, 2003
- Выготский, Л. С. (1934/1982//2001), *Мышление и речь*, в кн.: Л. С. Выготский *собрание сочинений*, т. 4, М., Педагогика, 1984. 邦訳はヴィゴツキー『思考と言語』柴田義松訳, 新読書社, 2001 年
- Deleuze, Gilles, (1688//1991), *Spinoza et le problème de l'expression* // Жил-Доллеруз『スピノザと表現の問題』工藤喜作・小柴康子・小谷晴勇訳, 法政大学出版局, 1991 年
- Descartes, R., (1649//1977), *Les passions de l'âme* // デカルト『方法序説・情念論』野田又夫訳, 中公文庫, 1977 年
- スピノザ (1677//1951), *エチカ*, 畠中尚志訳, 岩波文庫

〔付記〕

本研究のために平成 17 年度佛教大学特別研究費の一部を使用した。記して感謝したい。

(かみや えいじ 社会福祉学科)

2005 年 10 月 19 日受理